国木田独歩の佐伯での生活（二九）

故山内武麒

六月の記について書く。

一日の記

漠然たり、愛昧たり、又た実に暗々たり。

若し心を定めて爾の生存する此宇宙に対する時に於ては、如何に爾の心のをのゝくよと、自分の心は漠然として愛昧であるが、心を静めて生存しているこの宇宙に対すると、心がおのゝく。と記して、存在ということについて次に記してある。

存在！　これは言葉ではない。伝説でもない。また慣習でもない。争うことの出来ない事実である。

自分の存在を感じることが強くなるにつれて宇宙のミステリアス（神秘）を感じることが深くなった。

ミステリアス！　これは言葉ではなく、直覚する直射の光である。

それなのにこの人間は暗黒の中を迷い動いてそれを知らない。薄弱に無明に頑固に妄想の中で生滅している。

自分の信仰は何によって立つべきか。たゞ自分には遠いものにも通じる情がある。情は美妙にふれ又た至誠にふれて動く。

吾が光はこれのみ

と、情について記してある。

二日

人間は暗黒のうちに坐している。時々一閃の信念の霊の火を通じて光明を見るのみである。

茫々としたこの宇宙、時の無限と無極の場処とを包んでいるこの宇宙である。

暗黒であっても生命は光である。生命の源を信じる。故に光明の心を信じる。

この宇宙にこの生命、調和は何処にあるか本当の意味はどこにあるか。生命そのものが調和ではないか。これが本当の意味ではないか。

哀々る哉、悠々たり、田園の生活！　茫々たり此の宇宙

光と情とは神にあり。

と、暗い人生で光と情を求めている
次に
生命！　生命！　而して此自然宇宙
生命の源、生命の心！　何処に求めん。
信仰は何に由て立つ可き
漠然たり、「吾」と「自然」との関係、
恐ろしきは自然、広遠無限なり。
「吾」は只だこゝに戦慄して立つか、
嗚呼「吾」！　自然を知らず。
黒死病は流行の猛勢を張らんとす。
死！　偶然！　命運！
「吾」は此等の暗影にをのゝく可きか
嗚呼暗黒の児よ。去れ、
小我、空栄、恐怖、皆な暗黒の児也
神は大なり。
と、人の生命について詠じてある。
次に
昨朝バーンスの*to mouse*を読んだ
早稲田文学を読んだ。
源平盛衰記を読んだ

英雄論を講義してカーライルのシンセリティを益々味うことが出来た。
昨日国元から手紙がくる。また吉見さんからも手紙がくる。金子君からはがきがくる。
友達からの手紙は自分に人間を思い出させる。

三日

「吾」、人間の光明を通じて更らに無限の光明を仰ぎ、
「吾」、人間の暗黒をのぞき見て更らに無限の地獄を見る。
と、記し、この宇宙自然の生命は、われ〳〵人間の生命であり、人間の生命は宇宙自然の生命である。
光明は人にあり、また宇宙の心である
暗黒は人にあり、宇宙の蔭に見る。
と、この世の光明と暗黒を記してある。

四日

光明が天地に充ちて大道が宇宙に行われていることを人間が確信し得ることであれば、何故にわれ〳〵人間は

古物を愛するように、昔の聖者にのみ帰依するのか

神は宇宙を統轄し合うて人生を愛し、常に大道を示して導き給うことが真理であるならば、吾は人生を享けて宇宙にあって人と交わる。また大道を悟って之れを衆生に明示すべきである。

嗚呼人生！　と云うよりは人間！　これの方が意味が深い。

過去・現在・将来という時に何の意味があるか。

生命は宇宙に流れ、大神が無窮に統整している。「吾」の立場はこれのみである。

しかし地上の「吾」は幻のようである。吾は幻ではない。わが生命は不死である。死とは地上での幻のみ、地上の生命は幻である。「吾」これは不朽の自覚である。

地上は幻である。真実なものは霊界である。

と、永遠の生命を考えている。

次に

昨夜教会で「シンセリティ」について話した。

今ひたすら思いつゞけているものは「梶原」である。

今夜は「たけとり」の一節をものにした。

次に

己に宇宙のホールを感じ吾が生命其のものをこのうちに痛感す。吾がゆくべき途は二ツのみ。

と、記して

生命・不死・希望・光明・善美の大徳を信じるか。それとも

冷たく自分から身をおとしてこの冷界に消滅してしまうか、

この二つの一つである。

大綱はこれである。しかし不思議にもこの二つは相まとい合って人間をなやます。

両方とも真実か、それとも両方とも空か、一つが真で一つが空か、この三つ決定より外にない。

と、人間の心の持ち方を記してある。

人間は客観してみても、それ自身に於いても宇宙でも最も妙なものである。

人間は人間を深く知ることによって「吾」の深さを知るようである。余は近頃人間そのものを見ている。

人間のことで面白いのはその歴史ではない。行為でも言語でも境遇でもない。人間そのものである。

この心で人々を見ると、人として益々面白くなる。
と、人間を深くよく知ることの大切なことを記してある。

五日

宇宙はホールである。凡ての過去・現在・未来、凡ての人間、凡ての出来事、凡ての命運、山河草木、月星太陽、無形有形、法則　衝突、凡て宇宙のものである。
是れで「吾」である人はこれらの差別変化のうちに最真の神を感じ意識するのである。
宇宙はホールなり。吾をして幾度も此の意味をくりかやしめよ
最真の神を感じ信念火の如く起る也
と、宇宙について記し、次に宇宙についての詩がある。
宇宙はホールなり然りまことに然り。
月よ花よと呼びかけん
星よ鳥よと言ひ呼ばん
あまつ大神たゝへなん
さり乍ら、はっきりとせぬ信仰は
常のよろこびもなく常の悲もなく
常の剛毅もなく常の希望もなし
明なる信仰よ来れ、
神よ　大神よ　愛にみち給ふ神よ
と、信仰をもてと呼びかけている。

六日

聞け、「近代」の声を、ごたゞくとしている　かれらが実際と言っていることは妄想のみである。唯物、論争の世となった。
信仰の声はどこにあるか
男も女も権利義務、批評論争の世になりつつある。
わが信仰は極めて漠然としている。シンセリティに乏しいのである。たゞ盲動している。
宇宙、自然と自分との関係がどうしてこんなに愛昧なのか
世間の声はすぐ耳にする。しかし自然の大声は耳に入りにくい。世間の法則は目につきやすい。しかし自然の大法則は不問に附そうとする。
小我、先入、感染の衣は着やすく、信念の心は高まらない。
更らに人間の光明、吾が信念は？

自然と人生は口先きの言葉ではない。

と、近代の声にまどわされずに確乎たる信念のもとに進めと警告している。

七日の記

今日は学校を休んで、「今井氏に与ふる書」を書いて只今（夜十時）までかゝった。書いたことは近頃の自分の思想である。そのあらましは此の日記中に書いたことである。

次に信ずるということについて

美は信ずるに由りて美のみ。批評して何の意味あらん

美を信ずるを得ば吾と宇宙との関係に多少の光を与へん

吾は美を真ずと信じたり。

されど「生命」を信ずる能はずんば美を信ずる能はざる可し。

冷然たる天地の一片間に在りて美何かあらん

嗚呼何者をか信ぜんことを欲っす。

大神を信ぜん。大神を信ずるの外能はざるに非ずや

更らに光明、更らに信念、

と、記してある。美を信じ神を信じるとある。

この今井氏とは今井忠治のことで山口中学校以来の親友で、小説「暴風」の主人公となっている。

「今井氏に与ふる書」とは遺稿の「信仰生命」のことである。「欺かざるの記」の五月十八日、十九日の記を引用して、夜更けに独りで寂莫の谷を歩いて恐怖におそわれ、その時色々と浮かんだ感想を書き、そこに生れた信仰心について記してある。これは後に改作して「苦悶の叫び」という著作となった。

八日の記

昨日は細雨粛々、今朝は日光各赫々　山野に光輝みち、蒼空に清涼みつ。

と、ある。この頃の変りやすい天候を巧みに描写き、天気に誘われて岡の谷を散歩している。

路傍の草花露のうるほひ、頭上の新緑のかげ冷やか。

と、谷の風情を記して

人間の住み家はこゝである　よく心を開いて見よ。と云っている

次に

「近代の妄想は恐る可き哉」と書き出してその妄想について記してある

近代の妄想とは何か

近代思想から起る妄想である。これは近代の教育から近代の思想に感染したものと見るべきである。この妄想が目下最も進歩しているものがいだくものであると横行している。

新聞記者・政治家・教育家・科学者に最も多い。彼らに信仰の人や宗教の人を目指して妄想家と見る。そして自身がかへって近代の妄想に迷い狂っていることを知らない。

あゝ「近代の妄想」とは何か

次に

わが国の人でシンセリティな人は少ない。いや近代の世界はみなそうである。昔もそうであった。

あゝもっと明瞭に宇宙の秘密にふれることは出来ないのか。人生は秘密である。

しかし、たゞ心を開いて自然の前に立て。人間と自然との関係をもっと率直に感得せよ。自分はこう云いたい。

しかし言葉に過ぎない。

自分は更らに深く信ずるところを得たいと願っている。神については勿論、わか生命、美善について、

「人類的主観をはなれて宗教も哲学も詩歌もない。

人類的主観で自然を見るときはじめて大神を仰ぎ得る人類的主観で、花を見、月を見、人を見ると、美の信、善の信が起る。そうでなかったならば吾と宇宙との関係はノンセンスのみである。

あゝ吾は人間、生命がある。この宇宙に立っている。吾にたゞこの主観があるのである。

宇宙は神聖で不可思議である。この主観があると益々そうある。

と、人類的主観について記してある。

「近代の妄想」とは要するに人類的客観の幻である。